

COVER LETTER

2017/01/23 現在

高野未歩

大学では史学科に在籍し、主にインドを始めとする南アジア地域の女性や宗教について専攻していました。政府によって禁止された今なお残るサティーという慣習と、その廃止運動を行った **Ram Mohan Roy** という人物をテーマに、第一次史料として英語文献を中心に使用し、卒業論文を執筆しました。また、論文執筆のために始めたヒンディー語は現在進行形で学習中です。1 年次より 4 年間、授業を通じてインド人教授の元で南アジアを深く学ぶ機会があったことも、卒業論文のテーマに南アジアを選択するきっかけになりました。

学外の活動といたしましては、日本 GCC 学生協会という、中東、特に湾岸諸国との学生との交流や相互理解を目的とした学生団体に所属し、毎年 2 月に行われる渡航の際の渡航リーダーを務めた後、団体の代表を 1 年間務めました。リーダーという立場で様々なものや人を束ねていく経験もなく、あまり得意ではなかったため、渡航リーダーに選出された際は、果たして自分がやり遂げられるかどうかと不安で押しつぶされそうになりました。しかし、行き詰まった時はメンバーに協力や意見を求めることや、作業の分担をお願いすることなど、組織の中で仲間と共にどうやって物事を進めていくか、立ち振る舞うべきなのかを学べる貴重な機会となりました。湾岸諸国の学生だけではなく、進出されている日本企業様や、現地企業様を訪問させていただく機会もあったために、アポイントメントを取る段階から現地に到着してからも、常に緊張の連続でした。中東という地域性、または国民性なのか、なかなかコンスタントに返信がないことや、直前になるまで全く目処が立たない予定もあり、日本の常識や物事の進め方は、一步日本の外に出ると通用しないのだと痛感させられる部分もありました。しかしながら、アラブのホスピタリティーを様々な場面で感じ、異文化を直接肌で理解することの楽しさを感じるきっかけにもなりました。

学生団体での活動を通じて感じた、異文化を理解する楽しさや必要性は、中東への渡航リーダーを務めたのち、2015 年 4 月からの半年間、大学を休学して行ったカンボジアでのインターンシップで、さらに身近なものとして感じるようになりました。貧困層の女性の雇用創出や経済的自立を目指す NGO での勤務は想像以上に困難が多く、オフィスのほとんどをカンボジア人スタッフが占めていたこともその要因の一つです。もちろん英語でのコミュニケーションが要求されますが、私とカンボジア人スタッフの英語レベルが共にあまり高くなかったため、単なるコミュニケーションを取るだけでも最初は一苦労でした。それどころか、私の直属の上司は英語が堪能なカンボジア人女性で、容赦なく私一人での営業をスケジュールに組み込んだり、電話でのアポイント取りを要求してきたりと、「習うより慣れよ」という実践重視のスパルタな方針に弱音を漏らしたこともあります。しかし、辛

いと思っていた英語での営業や、アポイントメント取りを何度も繰り返していくうちに自信がつき、最終的には数字を意識しての営業ができるまでになりました。もちろんこの段階に至るまでには、アポイントメント前のデモンストレーションや商品説明の練習、日本と同じように上下関係を重んじるカンボジアでの礼儀作法を見よう見まねで実践し、簡単なクメール語を覚え、少しでも取引先に親近感を持ってもらうようにするなど、様々な努力を重ねた背景があります。カンボジアをより深く理解するため、積極的にカンボジア人スタッフをランチに誘い、スタッフが住む村でホームステイやヒッチハイクを体験したことも、努力のうちに挙げられると思います。語学という面での英語は、海外で必要となるスキルではありますが、自分がどれほど現地の人や慣習を理解しようとする努力ができるか、異文化への順応性があるか、ということも必要となるもののうちのひとつではないかと感じ、自分にはその素質があると強く感じました。

帰国後は、半年間の業務を通じて英語の必要性を感じた経験から TOEIC を受験し、810点を取得しました。また、大学でプレゼンテーションのやり方やメールの書き方などを習うことのできるビジネス英語講座を複数受講し、カンボジアでは不足していたと感じる部分のスキルを補う努力も重ねてきました。